

東工大基本情報

を行いつつ、所蔵する資史料が物語る本学の魅力を「とっておきメモ帳」などの出版物を通じ、学内外に発信しています。歴史的に重要な文書を保存する、「公文書室」も併設されています。

■東京工業大学歌

参照 URL：東工大 HP→東工大について→大学概要

→大学歌・マーク・カラー→大学歌

<http://www.titech.ac.jp/about/overview/logo/song.html>

東京工業大学歌	現代語訳
<p>三好達治 作詞 諸井三郎 作曲 昭和31年(1956)制定</p> <p>一 逝くものは 斯のごときか 長江は 昼と夜となし はるけき日 ゆかきさいさを 指す方の はた窮みなき 嘆じてん 聖さびはや</p> <p>二 悠久の 黄金の環 めぐりくる陽は久方ゆ 青春の園生にたらふ 手力はわがもろ腕に 重き扉をいさ若人よ</p> <p>三 くろがねの 扉を開け 工人よ 窮理者よ友 かつは見よ みどりの木の梢 すばる星 灯を点じたり 友達が 七つの窓へ</p> <p>四 七彩の ものの 文すべ ただ光 彼方に白し さやかなり 月毛なりかし 騎してゆけ はるけくもこそ 大きな岡 こえていく岡</p>	<p>一 流れゆくものは このようなものか 大河は(そして東工大の伝統は) 昼も夜も流れ続ける (注1) 遠い日(戦前工業の時代) なつかしい勇者(先輩)たちが 目指していた方向の なんと窮み(はて)のないことか 賞賛しよう 聖人のようだと</p> <p>二 想像もつかないほどの昔から続く 黄金のリング 毎日めぐってくる太陽は 昔も今も変わらない (注2) (東工大という) 青春をはぐむ学園で活躍するに相応しい 手力(力量)が(今の) われわれの両腕にはある 重い扉を(開けよう) さあ若人よ</p> <p>三 (黒い重い) 鉄の扉を開けよ (注3) 工学を志す者よ 真理を追究する者よ わが友 そして見よ 緑の木の間に すばる星が 灯をともした (注4) われらの友が 七つの窓で</p> <p>四 七つの光とりどりの学術よ (注5) まっすぐにさす光の先に 白く輝くものがみえる 明るくはつきりとみえる 月毛色(赤みがかった白色)の 馬(本館)だ (注6) その馬に乗っていけ はるか遠くまで 大きな岡を いくつも越えて (注7)</p>
	平成22年5月1日改訂

現代語訳注

(注1) 東工大の前身である東京高等工業学校は、隅田川のほとり、浅草の近く、蔵前の地にあった。「大河」は隅田川の連想である。大岡山に移転したのは関東大震災の直後の大正13年、東京工業大学になったのは昭和4年である。
冒頭の2行は孔子が川のほとりで歎んだ「逝くものは斯くの如きか、昼夜を會かず」を踏まえ、人間の流れも、そして東工大の伝統も、大河のように絶えず流れ流れながら、いろいろな困難を乗り越え、大海を目指していく、ということを示唆していると思われる。

(注2) したがって偉大な先輩と同じ血がわれわれの身体にも流れている、と言いたいのであろう。

(注3) 当時の正門は、重い観音開きの鉄の扉であった。記録によると、作詞の段階でははじめは「扉を押し開け」であったが、作曲の都合で「扉を開け」に変更された。

(注4) すばる星とはブレアデス星団の和名である。なお、昭和35年に東工大の自動車チームが軽自動車「スバル」でマルセーユからモスクワまで15,000Kmの大陸横断を成し遂げた。これは当時のわが国の技術水準の高さを示す快挙であった。

(注5) 「ものの文すべ」の「すべ」は漢字で「術」である。作曲当時の学部は10学科、大学院は7専攻であった。

(注6) 周囲の建物や立木を全部取り除いてスロープの下、グラウンドあたりから本館を眺めることを想像して欲しい(昔の写真にそのような写し方をしたものがある)。すると本館は月毛色の、頭を高くあげた、分厚い胸のがっしりとした馬に見える。

(注7) もちろんこれは「大岡山」を連想している。